戦前期の児童保護施設と或るミッションスクール

― 仙台基督教育児院と尚絅女学校の関わり―

田　澤　　薫

The Sendai Christian Orphanage and SHOKEI Girl's School before World War Ⅱ.

Kaoru Tazawa

レジュメ

従来から児童保護・福祉と教育とは関連の深い領域と目されながら、その実践の場での連携の実際は必ずしも明らかにされていない。本論文では、第２次大戦以前の仙台基督教育児院と尚絅女学校との関わりに光をあて、児童福祉制度が未整備だった戦前期において、制度によらない連携がいかになされたかをいくつかの具体に沿って整理し、社会事業史の手法で検討を行った。この研究作業を通じて、児童の発達を支援する実践において、育児施設と教育機関は複層での連なりを保ちながら相互補完的に共存しうることが示された。育児院と尚絅女学校の例でいえば、開設の際にともに貧児教養の理念にたったことを基盤として、同じキリスト教主義をとる同朋意識のもと、きわめて密接な関わりをもっていた。育児院の側からみれば、尚絅女学校と太いパイプを保っていることが、施設養護における自立支援の質の向上につながっていた。

キーワード

児童養護施設、育児院、高等女学校、社会事業史

はじめに

本論文では、第２次大戦以前の仙台を舞台として、児童保護の実践にミッションスクールがいかに関わったかを、仙台基督教育児院（以下、育児院）と尚絅女学校とに光を当てて検討することを目的とする。従来から、児童保護・福祉と教育とは関連の深い領域と目されながら、その実態は必ずしも明らかにされていない。感化教育の領域においては、筆者がこれまでに制度面のほか私立感化院「家庭学校」を対象とした検討を行ったものの[1]、より広範な児童養護の領域については、まだ研究は途上である。本論文は、筆者による児童養護と教育の関連を歴史的に探る一連の取組みの一つをなすものである。

育児院は、多年、研究対象として社会事業史研究者たちに取り上げられてきた施設で、相当の研究蓄積[i]もある。その魅力的な実践が、広範囲にわたる人的・物的ネットワークの中にあって実現したことは想定されるものの、その実際に踏み込んだ整理はいまだなされていない。本論文は、育児院の多方面にわたる実践を、教育との連携という関心から尚絅女学校と接するひとつの側面で切り取り、重層的に織り成す支援関係の綾から、各種学校のなかでも殊更に育

i　仙台基督教育児院八十八年史編纂委員会編『仙台基督教育児院八十八年史』1994のほか、東北社会福祉研究連絡会のメンバーによる研究が主として『東北社会福祉研究』誌において報告されている。

児院と縁の深かった尚絅女学校との関係を浮かび上がらせることで、ともにキリスト教をよりどころとした児童の保護施設と女子教育機関との関係を整理する試みである。

まず、研究の対象となる育児院と尚絅女学校について概観しておきたい。

育児院とは、東北において早期に創設され、今日にいたるまで東北の児童養護をリードしつづけてきた施設である。1905（明治38）年に宮城県はじめ福島県、岩手県の広範囲をおそった東北大凶作と、続く厳冬期の飢饉にあって、被災地の惨状をみかねたメゾジスト教会の来日女性宣教師のF.E.フェルプスが、1906（明治39）年２月に教会員の私宅を借りて「東北育児院」を開設したことにはじまる。当時、宮城県から被災地各郡へ出された通知には、「当市東三番丁二番地居住ノ外国人フェルプス氏ハ凶作地ノ窮状ニ深ク同情ヲ表シ無告孤児等左記各項ニ当ル可憐ノ子女ヲ収容シテ教養致度旨申出」[2]（下線は筆者による）と記され、被災児童の救済を目的とする施設が、最初から「教養」を理念としていたことがわかる。この方針に従って、育児院では、一部例外はあったものの、原則として就学年齢を迎えた６歳の児童から入所の対象とした。育児院は、その後、仙台育児院を経て、1909（明治42）年に仙台基督教育児院と改称された。仙台キリスト教育児院と称する今日まで一貫してキリスト教を基盤とした児童養護事業を行ってきた、今日の児童養護施設である。[i]

一方、尚絅女学校[ii]については、学校史の中から本論文に関係のある事項のみをたどる。1892（明治25）年に米国バプテスト婦人外国伝道協会から遣わされた婦人宣教師たちによって、キリスト教により日本の子女に教育を授けるために創設された尚絅女学会をもとに開かれた。初代校長はA.S.ブゼルであり、1899（明治32）年に尚絅女学校として設立認可をうけ、1910（明治43）年以降の卒業生について「高等女学校卒業生と同等以上」と認める旨が指定された。1919（大正８）年に付属幼稚園開設されたが、このときの幼稚園は1921（大正10）年に閉園された。

研究の方法

本論文では、育児院が所蔵する施設資料[iii]、宮城県公文書を多く論拠としたほか、永年勤続の旧職員からの聞き取り調査から得られた言説を理解の手がかりとした。

本論文で取り上げる山田省子氏（以下、山田保姆）の調査は、2000年より現在まで継続している。山田保姆（1912.12.6生）は、1933（昭和８）年より奉職し、第２次大戦中・戦後に10年間の帰省のための退職をはさむものの、定年まで保姆・保母として勤務し、その後の嘱託勤務を経て、現在は子どもの施設と同じ敷地にある同じ法人の特別養護老人ホームで生活している。女性の福祉従事者としては早期の1969（昭和44）年に勲七等宝冠章を授与され、公的にも保育職としてのはたらきが高く評価された。東北地方の先駆的な児童施設で実践の中枢にあった立場から、ここ70年を見渡しての具体的な話が期待されるが、本論文に即していえ

---

i　現在は、仙台キリスト教育児院：宮城県仙台市青葉区小松島新堤
なお、児童養護施設とは、児童福祉法に定められた児童福祉施設の一つで、保護者のない児童、虐待されている児童、その他環境上養護を要する児童を入所させる。入所児童は、学齢にあるものは施設より地域の学校に通学する。

ii　現在は、尚絅学院大学：宮城県名取市ゆりが丘

iii　育児院は1909年の開設当初からの簿冊資料が比較的潤沢に保存されている。筆者は、主として第２次大戦以前の資料について2000年に資料の整理と「仙台基督教育児院所蔵資料目録」の作成を行った。本論文で育児院資料を引用する際の分類番号は目録の整理番号である。

ば、まさに育児院と尚絅女学校のつながりの傍らにあった育児院職員ならではの貴重な証言が得られた。後に紹介しながら、論考を進めるよすがとしたい。

1 育児院の子どもたちの就学と尚絅女学校

①育児院児童の初等教育の実際

先に紹介したように、育児院では最初期から「教養」を実践理念として掲げ、その言に違わず、開設直後から院内に学校を設けたり、地域の学校に児童を通学させる算段を整えたり、入所児童の就学に心を砕いた[3]。歴代院長の顔ぶれをながめると（表１）、教育関係者がほとんどを占めていることに気づかされる。

表１：第２次世界大戦以前の仙台基督教育児院歴代院長

院長名	在職期間	院長就任の前職
F.E.フェルプス	1906 — 1909.3	宣教師、自助学館館長、本国では小学校教員
H.W.シュワルツ	1909.4 — 1912	医師
ワトソン	1912	宣教師、女学校校長
ルイザ.イモホフ	1912 — 1922	宣教師、女学校校長
ホワイトマン	1923 — 1924.3	宣教師、婦人救護活動
北野高弥	1924.4 — 1932	牧師、元小学校教員
大坂鷹司	1932 — 戦後	牧師、元漁師

しかし、院長が学校教育に重きをおいていたからといって、それが育児院の実践ですぐさま有効に機能したとは限らなかった。年毎に出された事業概要の昭和初期の版には、「院児には国民教育を施すことを原則として居ます。それで普通児は公立小学校に通学させます。然れども院に収容いたします如な児童は身体又は精神に欠陥のある者が通例であります。（中略）公立小学校内では一般家庭の児童と併行して進歩する見込みなき者も少なからずありますから、院内に設けある小学校にて、それ等を教へて居ます。」[4]と記され、就学を推し進めようにも児童自身の負う課題ゆえに如意に運ばない現実がうかがわれる。「院に収容いたします如な児童」と諦観をもって示されている児童の実態は、別の資料によれば「父母の悪質、梅毒又は結核、酒毒等に依る身心ともに劣等なるもの多く盗癖ある者あり、又収容前の乞食的生活に慣れ床下に臥し物置に寝ねて平然たる者あり、真面目に通学する者稀にして登校厭ひて山野に遊び受持訓導又は育児院保母の叱責を恐れて市内を徘徊し」[5]というような、学校教育に極めて馴染みにくいものであった。

②進学する児童

こうした大勢のなかにあって、しかしながら、尋常小学校を終えた後の更なる進学を果たす児童もいた。

戦前の在院児童の記録を繰ると、育児院には、入所期間が大変長期にわたる児童がまま見られる。就学年齢の頃に入所して20年を超えて在所する児童も少なからずおり、対象年齢を18歳で区切る戦後の児童福祉では考えられない。これらの児童は、どのような事情を抱えていた

のだろうか。まず想起されるのは児童が障害を抱えていた可能性であるが、そうだとすると長期在院の児童の「退所事由」に多く「独立」と記されていることの説明が付かない。

この謎が解けたのが、進学に関連する資料によってである。育児院の入所児童が、上級学校に進学した経緯はすでに別稿で明らかにしたが[6]、そこでの整理によると、進学先の学校は、仙台市内のミッション・スクール（東北学院・宮城女学校・尚綱女学校・自助女学館ほか)、特に神学や看護学などの専門課程を中心とした東京・横浜・大阪のミッション・スクールなどであった。尚綱女学校には、1910（明治43）年から1927（昭和２）年までの間に、５名が入学していることが記録からたどれる（表２)。

表２：仙台基督教育児院から尚綱女学校への進学者一覧

1）この表は仙台基督教育児院所蔵資料をもとに田澤が作成した。
2）児童氏名はイニシャルとした。児童欄下段は記録にある生年月である。確実でない場合は「推」と付した。
3）各記事の後に生年月日から換算した年齢をカッコがきで付した。

年	児童 / 院長	Y.H. 1894.3	Y.K. 1898　推	S.K. 1898.11	T.T. 1913.1	O.M. 1898.1
1910	シュワルツ	入学・通学（16）				
1911		席次７番				
1912	イモホフ	通学	通学	入学・通学（13）		
1913		通学	通学	通学		
1914		寄宿	寄宿	寄宿		
1915		卒業→大阪女子神学校（21）	寄宿	寄宿		
1916		在学中死亡（22）	寄宿	寄宿		
1917			卒業→聖路加看護学校（19）	寄宿		
1918				寄宿		卒業（20）
1919						
1920			結婚・退所（22）			
1921						
1922						
1923	ホワイトマン					
1924				結婚・退所「独立」（26）		
1925	北野高弥					
1926					受験（不合格） →高等小学校入学	
1927					入学 ９月に高等小学校へ	
1928					就職（15）	

これらの進学者たちは、学校が遠方で寄宿のために育児院から離れる場合でも、育児院に在籍のままであった。当然ながら帰省の先は育児院であったし、学用品や寄宿に必要な物品の支度も育児院で行った[i]。そして彼らは、就職や結婚など、完全に自主独立する時期を迎えてはじめて育児院を退所していったのである。

③ある尚絅進学者

ここで一人の尚絅女学校への進学者S.K.に着目したい。

S.K.は1898（明治31）年11月9日、宮城県に生まれ、育児院開設のきっかけとなった大凶作の翌春にあたる1906（明治39）年4月4日に「貧困」を事由として入所した。S.K.本人は7歳、4歳の弟も一緒だった。入所時に母親はなく、父のみの家庭であった。1912（大正元）年4月、イモホフ院長時代の育児院から尚絅女学校へ入学した。2年間、北四番丁と光禅寺通の角地にあった育児院から中島丁の尚絅女学校まで徒歩で20分ほどの距離を通学したのち、1914（大正3）年度以降は寄宿舎に入った。1924（大正13）年12月31日に26歳のときに結婚を機に、「独立」を事由として育児院を退所した。育児院に残された資料からたどれるS.K.の経歴は、以上である。

実は、S.K.の足跡は、尚絅女学校の資料にも散見される。S.K.は、尚絅女学校の本科家政科第1期を卒業したのちに、聖公会が運営する、当時は仙台で唯一の保育者養成の課程があった青葉女学校で保姆資格を取得し、1919（大正8）年、新設された尚絅女学校の附属幼稚園で保姆または助手として勤めた[ii]。

S.K.をめぐる事情を今少し明らかにするものとして、次の記事も看過できない。

「1919年7月9日、ブゼルは幼稚園の正式認可を見届けて、…幼稚園開設前年、すなわち1918年11月11日付のブゼルより友人のフローレンス・ハリス宛書簡によれば、彼女が送った30ドルの寄付に対してブゼルは心から感謝し、それを来春開設される幼稚園に勤務するために、教員養成課程の最終学年を勉強中の、一人の女子学生の支援に当てたいと書き送っている。ブゼルはその学生に対してすでに4年間の援助を与えていたとあるから、幼稚園開設についてはかなり前からその計画を温めていたらしい。」[7]

ここに記されている「一人の女子学生」とはS.K.と見てよいだろう。S.K.の尚絅女学校への進学がブゼルの支援を受けてのものであったこと、さらに青葉女学校への進学はブゼルの勧めがあってのものと考えられること、おそらくはS.K.の能力を見込んだブゼルが、附属幼稚園の開設準備要員としてS.K.を青葉女学校に派遣したと思われることがここから読み取れる。

1899（明治32）年に制定された尚絅女学校の旧学則には、「困窮にして学費を支弁し能はざ

---

i　育児院日誌には、1912（大正元）年10月8日に「昨日女学校通学生ニ下駄ヲ与フ」という記述がある。このときの「女学校通学生」は尚絅女学校に通う3名のほか、自助学館に通う1名があった。
また、1913（大正2）年の日誌には、この年宮城女学校に進学したT.T.に関する記事が多出する。「3月25日　T.T.宮城女学校寄宿舎ニ付身体受診ノ為宮城病院行」「4月7日　T.T.本日ヨリ宮城女学校寄宿セリ。布団其他ヲ送付セリ」「9月9日　T.T.ニ袴買求メタリ」などであり、進学に伴う支度を育児院が公務として行っていたことがわかる。

ii　「この間（1919年―1921年：筆者註）、幼稚園教諭または助手として勤務したのは、半沢よし（本十七）、斎野きくの（本家政一）、相墨ミツ（本十八）、三宅はる（本十九）、武藤キヨノ（本十九）の5人であった。いずれも尚絅女学校を卒業卒業後、市内元柳町六十九番地にあった青葉女学院（聖公会派）で二年間の幼稚園教諭養成過程を学んだ人たちである。」とあり、誰が保母で誰が助手であるかは未詳である[10]。

る者の為めに、全部若しくは一部の費用を貸与することあるべし」という「貸費生」の規定があった。この貸費生は、「卒業後其の額全部なるときは２ヵ年、一部なるときは１ヵ年間校務を補助するの義務を有す」[8]ことが決められており、この規定に沿って考えれば、S.K.の場合は２カ年間の校務補助が義務付けられたとみられる。だとすると、附属幼稚園での勤務は、学費貸費を受けた者としての義務を果たしたに過ぎないことになる。しかしながら、S.K.にとっても育児院にとっても、育児院に在籍する元「貸児」が附属幼稚園の開設メンバーであることは、栄えあることではなかったか。しかも、実際にはS.K.の在学当時の学則にはすでに貸費生の規定は盛り込まれていない。1908（明治41）年の学則改正の折に宮城県知事に宛てて提出された申請書には、「旧学則より削除すべき重大なる項目」として「本校創設当初の目的は、貧児を教養するにありき。故に生徒数も極めて少く、何れも貸費生なりしが、漸次生徒数を増加するに従ひ、自費生も多く来り学ぶに至れり。現時に於ては貸費生数名あるのみ。而して一方に於ては教授力の増加、一般設備の完全を要するに至りたるを以て、新に貸費生を募集することを止め、これに対する一切の資金はこれを別途に支出することとせり。」とある[9]。学校経営の方向転換から貸費生の規定をなくした後も、S.K.のような生徒があるときには、建学当初の「貧児教養」の理念に立ち返って便宜を図っている点が注目される。

改めて指摘するまでもなく、育児院と尚綱女学校ともに「貧児教養」を理念としていたとすると、恵まれた贅沢で稀有な事例として育児院から尚綱女学校への進学が位置づけられるのではなく、学童期から青年期にかかる貧困女児の教養を育児院と尚綱女学校が連携して担ったとする見方はあながち的外れではあるまい。

２育児院と尚綱女学校の人脈―院母大坂トヨとブゼル校長

育児院と尚綱女学校の関係を語るとき、尚綱女学校本科家政科第１回の卒業生であり、育児院６代院長大坂鷹司の妻として院母をつとめた大坂トヨをとりあげないわけにはいかない。

まずは、大坂トヨと尚綱女学校の初代校長であったA.S.ブゼルとの交流に着目したい。

大坂トヨの尚綱女学校卒業は、1918（大正７）年である。ブゼルが休暇帰国のあと再び校長職に就いたのが1912（大正元）年、校長を辞し遠野に赴くのが1920（大正９）年であるから、大坂は尚綱でのブゼル校長の晩年の教え子の１人として、存分にブゼルの薫陶をうけた経験を持つ。のちに大坂の間近で勤めた山田保姆が「（大坂は）だから、ブゼル先生にはうんと」[i]と表現するように、大坂のブゼルへの思いはひときわ強かったようである。

尚綱を去ったあと、ブゼルは遠野から1933（昭和８）年に再び仙台の地に戻り、1936（昭和11）年に昇天するまでの最晩年を関係者から捧げられた仙台市内の上杉のブゼル館で過ごした。一方の大坂は、大阪今里の女子神学校で学んだ後に神奈川県川崎市で婦人伝道師として活躍し、1930（昭和５）年、牧師である夫の大坂鷹司が尚綱女学校と縁のある仙台北星バプテスト教会に着任するのに伴って仙台に戻ってきた。1932（昭和７）年には、乞われて、運営者を失っていた育児院に一家で院長・院母として移り住んだが、このときの育児院は北四番丁の通りを挟んでブゼル館とはす向かい、「煮物の鍋をもって走って２～３分の距離」で、「奥さん

i　2003.5.12　山田保姆聞き取り記録

（大坂）は手が空くとすぐにブゼル先生のほうへ行って、何かいろいろとお世話を」[i]していたという。

実際には、育児院が北四番丁から小松島に移転したのが1935（昭和10）年2月、ブゼルが遠野から戻りブゼル館に落ち着いたのが同じ年の7月だから、日々の交誼とまでは及ばなかったものの、大坂は「仙台に用事ある毎に新宅に仮住ひし」[11]ていたブゼルのもとを訪れながら、恩師の傍らに在るという思いを噛み締めていたに違いない。育児院母の多用のなか、1934（昭和9）年に尚絅女学校同窓会の会長代理を引き受けていることからは、大坂の、ブゼルに対してだけではない母校への愛着を図り知ることができる。育児院の院母のほか、婦人矯風会、愛国婦人会、禁酒会に関わり、社会的に活躍していた大坂は、ひとりブゼルを慕っていただけでなく、自らの社会的活動の一部として母校との繋がりを持っていたといえるだろう。

大坂の尚絅女学校での学生生活に思いを馳せるとき、いま一度、育児院から尚絅女学校に進学した5人を振り返ってみたい。前掲の表2から一目瞭然なように、5人の育児院在籍児と大坂はほぼ時を同じくして同じ学窓にあった。1学年が10名から20名程度であった当時のこと、互いに知り合わなかったとは考えにくい。なかでも、附属幼稚園で勤めたS.K.とは、本科家政科第1期の同級生である。また、大坂の在学中に大阪の女子神学校に進んだ3学年上級のY.H.は、のちに同じ学校に進学した大坂には憧憬の対象であったのではないか。

育児院から尚絅女学校に進んだ児童と同じ学生時代を送った経験は、育児院母となった大坂の背骨となっていただろう。進学への希望、進学しない児童の職業教育、施設運営費用の捻出、この3つの課題に直面して大坂は院母としてどう采配を振るったか、次に目を移してみたい。

3 育児院の職業教育・事業と尚絅女学校

1934（昭和9）年、尚絅女学校の制服が改められた。上着はセーラー型で、襟に3本のお納戸色の蛇腹線が入っていた。蛇腹線と同色のネクタイは結ばずにネクタイ通しを通した。夏服は、上着が白で紺色の襟に3本の白線が入り、ネクタイ通しには梅の花の縫い取りが施してあった。スカートは冬夏服とも紺色のプリーツスカートであった。

それから2年後の1936（昭和11）年、大坂鷹司院長のもと、北四番丁から小松島の丘の上に居を移した育児院は、洋裁部の事業を開始した。措置制度に基づく第二次大戦後の児童福祉と異なり、戦前における施設運営に公費の保証はなかった。育児院は、1932（昭和7）年に施行された救護法による救護施設の指定を受けてはいたが、すべての入所児童が対象となるわけではなく[ii]、外国人院長の時代は多くを占めていた海外からの寄付金はほとんど期待できなくなっていた事情もあって、施設として経済基盤を確保することは緊要課題であった。当時、児童を物品販売や寄付募集に従事させる施設への批判があとを絶たなかったが、育児院では「創設以来三十年間1回と雖も、院児として物品を販売せしめたること無く、濫りに隣人に憐みを乞はしめた事はありません」[12]という姿勢を貫いており、洋裁部の事業は、施設の内部にあって、義務教育を終えた女児に洋裁の技術を習得させつつ施設としても収入を得られる手立てと

---

i　2003.5.12　山田保姆聞き取り記録：引用文中カッコ書きは筆者による

ii　1942年度の資料によれば、1年間に入所した115名のうち、救護法による児童（救護費用が公費による児童）[15]が29人、親が養育料を納めている児童が25人、育児院が費用を負担している児童が61人となっている[16]。

して考えられたと見られる[i]。1937（昭和12）年度予算によれば、洋裁部による作業収入としては200円が見込まれている[13]。

このときの育児院は小松島への移転を前年に果したばかりで、施設建物は新築であったが本館玄関上に位置する会議室に雨漏りがした。そこで、会議室の上の陸屋根に雨漏りを防ぐ意味からも増築がされた。その会議室上の部屋に、院長宅ほか育児職員宅からミシンが集められ、院母の大坂トヨが関係していた愛国婦人会宮城支部からも２台のミシンが貸与され、洋裁部が生まれた[14]。そこで縫われたのは、尚絅女学校の制服だったのである。

指導者としては、東京から洋裁教師が招かれた。その教師について、山田保姆は「その洋裁の先生っていうのは、大坂（鷹司）先生が（神奈川県）川崎で牧師をしているときの信者の人だったのね。だからその先生を呼んで、院長宅に泊まってもらってね」[ii]と語っている。大坂院長夫妻が個人的な人脈を頼りに、ともかくも洋裁部を立ち上げた様子がうかがわれる。

尚絅女学校に採寸に出向いたのは山田保姆であったという。「私はその子どもの寸法を測りにだけは学校に行ってね、名前を聞いて、ここと丈と、胴回りと、それを測って来て、そして洋裁の先生に。それによって先生が裁断して、一着分、誰の分、誰の分っていうふうにして」[iii]と、手順が語られる。洋裁部の目的のひとつは児童の職業指導であった。その状況を山田保姆は次のように、回想している。

「小学校が終わっても親が引き取れない子どもにね、昼は育児院の子どもたちの世話をしながら、何時間っていうその休みの時間を利用して洋裁を教えるんだね。…教えるための教材だといっても、制服はお金もらって納める洋服だから、子どもにさせるのは真っ直ぐ縫うことだけ。ここからここまで真っ直ぐやりなさいって、それだけをさせるとか、このボタンを付けなさいとか、そういうふうなことをね。（中略）指導っていうけれどもね、先生は先生で一生懸命裁断するし、私たちは縫う。（中略）私たちも仕事が終わって手がすくとそこに行って、手の込んだところやなんかは私たちが縫ってね。（中略）洋裁は院長夫人も手伝うしね。手のすいている人はみんな手伝って。それで何日までに仕上げるっていうときは、ほんとに寝る間もなくてね、ミシンかけしてね。」[iv]

保姆を助手にプロの職人が制服を仕立て収入を得ようとする側面と、年長児に洋裁の技を伝えようという側面の両立が、容易ではなかったことが伝わってくる。

育児院には、このときに使われた注文伝票と採寸表の用紙が保存されている[17]。注文伝票によると、扱いは尚絅女学校同窓会購買部であり、採寸表のほうに仙台基督教育児院洋裁部の名前がある。同窓会購買部から育児院に直接に発注がなされたか、あるいはミシンの貸付を担った愛国婦人会宮城支部が尚絅同窓会から受注した制服縫製の仕事を育児院に振り分けたか、そのいずれであろうが、この資料だけでは詳細は不明である。同様にして、注文伝票によると夏冬一揃いで20円となっている制服代金の幾割が育児院の収入になったかについても未詳である。当時、出来合いの綿製詰襟の学生服が一着２円であった（1933年データ）ことと比較すると、尚絅女学校の制服は大変に高価であり、むしろ注文背広（英国製布地、東京の1932年データ）１着35円のほうに近い[18]。この年代は４年制の高等女学部が置かれた時期と重なり、

---

i　同じ時期、義務教育を終えた男児を農業・酪農に従事させる農場の事業も開始された。
ii　2003.7.3　山田保姆聞き取り記録
iii　2003.7.3　山田保姆聞き取り記録
iv　2003.7.3　山田保姆聞き取り記録

入学生は毎年150人を超えた。手堅い仕事だとはいえ、縫製に神経質にならざるを得ない高価格品を、多量に、一定時期の短期間で仕上げなければならないことを思えば、注文制服は職業教育の教材として適切とはいいがたい。

育児院では、洋裁部の本格的操業の初年度とみられる1937（昭和12）年こそ3名の裁縫教師を擁したが、うち2名は単年度のみの奉職であり洋裁部のその後は不明瞭である。1939（昭和14）年の育児院の「事業概要」によれば、職業教育として「農業」「工業」「其他」があがっており、「工業」の項には、「鋸、鉋、ミシン、塗料等を使用する玩具製作」とだけある[19]。純粋な洋裁を業とする洋裁部はこの時点ですでに消滅している。愛国婦人会とも尚絅女学校とも密なつながりをもち、洋裁部設立の核となった院母大坂トヨの急逝が1937（昭和12）年10月であったことも無縁ではあるまい。

おわりに

これまでに見てきた育児院と尚絅女学校の具体的な事象からいま少し距離をおいて、児童施設と教育機関の関係を整理してみたい。

育児院と尚絅女学校の場合、最初期において、ともに貧児教養が理念として掲げられていた。開設から時期を経た後も、基本的な部分は継受されていたとみられ、育児院と尚絅女学校が連携して児童を育成した例、育児院に在籍のまま尚絅女学校につらなる専門職としての働きの場と地位を与えられた例、尚絅女学校の運営に不可欠な一側面―たとえば制服―をめぐる産業が、育児院の事業として、あるいは職業教育として機能していた例に、「貧児教養」の具体を見出すことができた。このことにより、育児院と尚絅女学校という児童施設と学校という本来別種の社会資源が、次世代の育成という事業を軸として、点ではなく面で接していたことが明らかになった。両者は、それぞれの事業にそった互いに異なる性質の側面で、対等に、相互に依存し活かし合う関係を取り結んでいた。

関係づける柔軟さは、両の事業の最初の担い手であった宣教師が、いずれの事業につく可能性をも秘めながら所与の仕事への忠心を使命としたこととも無関係ではあるまい。彼らにとっては、与えられた働きの場に応じて、貧児教養という共通項に向き合っていくに過ぎない。当然ながら、施設から上級学校への進学も、恵まれない境遇の児童に同情のある学校が便宜を図ったという、施設と学校を対として捉える見方は実態に即さない。育児院は、東北全域から貧困家庭の学齢児童を収容し、養育のみならず、生育家庭にあっては望めない学校教育を施した。学力に勝り学習意欲のある児童は上級学校への進学させ、伝道師、看護婦、保姆などの社会の支えとなる専門職の道を歩ませた[i]。そうでない児童には、基礎教育の上に奉公先を見つけ、職業を身につけさせた。例外はあるものの、多くの児童は途半ばにあるうちは育児院に在籍し、折々に育児院に足を運びながら独立への歩みを続けた。そうした後にはじめて施設の籍を解くことで、児童は生育家庭の貧困の再生産の連鎖から放たれ、かわって疲弊した地域の活力となりうる。凶作にあえぐ東北農村を前にしたとき、来日宣教師らの計画は育児院と女学校を別個

i 「院出身者の職業」（昭和五年度事業概況報告より、下線は田澤）
「中等学校教師3名、幼稚園保姆2名、牧師1名、牧師の妻1名、伝道婦3名、法律家2名、鉄道従事者2名、タイピスト1名、其他音楽者、産婆、看護婦、官吏及ビ其妻…」

に生み出したのではなく、両者の連携は想定の範囲内であったのではなかろうか[i]。

連携を推し進めたのは、おそらくは、キリスト教を基盤にしているという同朋意識であっただろう。ここで、中央政府からほど遠い東北の地・仙台の地域的特質を、近現代史にみるキリスト教主義の児童施設やミッション学校の地域への位置づきの視点から指摘しておきたい。仙台は比較的早期からキリスト教各宗派の伝道がなされ、ことに各派による学校がさかんにつくられたことで、キリスト教への一般住民の意識的受容が進んでいたことが指摘される土地柄である。キリスト者による、学校教育、貧困者救済、施薬などの社会活動が、自然災害に翻弄され厳しい生活を余儀なくされた東北の地の人々にとって即物的に恩恵として受け取られ、キリスト教そのものへの批判的あるいは懐疑的な忌避が生まれにくかった。この傾向は、同じように初期からキリスト教の広がりが見られた東京とは明らかに異なる。東京のキリスト教主義児童施設では、政府によるキリスト教への厳しい姿勢や思想統制が示されるごとに、施設の主義が問われる緊張を強いられたが[ii]、東京からの距離のある仙台ではそうした労苦からも割合自由でいられた。仙台においてこそ、キリスト教という特殊性を肯定的な要件にした児童施設と学校との関係の取り結びが可能となったといえる。

本論文で鳥瞰した育児院と尚絅女学校の関わりからは、鍵人物の存在が浮上した。育児院にも尚絅女学校にも重要なはたらきをなした大坂トヨは、無論、いずれの具体的な事実の要として機能した。しかしながら、かの人がいなければ育児院と尚絅女学校が繋がれなかったわけではあるまい。特定の個人を超えたネットワークにまで光を当てられなかったことは、本論文の限界である。この点については今後の課題としたい。

---

i 「旧制の（東北）学院ね。そういう進学者は、案外、学院や何かの先生からの紹介でもって育児院に入った子どもなのね。」（2003.7.3　山田保姆聞き取り記録）というように、山田保姆は育児院職員の目から、育児院とミッションスクールに共通して携わる教会関係者の存在が、保護の必要な児童を施設と学校の双方で受け入れる用意につながったと語る。資料的裏づけの難しい部分を補う貴重な証言である。実際に、育児院とミッションスクールの支えを必要とし、かつ能力のある児童の発掘に日曜学校が機能していたことを山田保姆は指摘する。「牧師さん方だったら、日曜学校にきている子どもの家庭状態っていうものは、みんなわかっているからね。それで声をかけたりってこともあったよ。」（2003.7.3　山田保姆聞き取り記録）

また、育児院と尚絅女学校の連携の体現者として、本論文の対象時期よりは時代が下がるが斎藤久吉氏をあげておきたい。氏は、塩釜教会の牧師職の傍ら、1937年から1975年の長期にわたり尚絅女学校と後身の尚絅女学院の理事、理事長、院長を歴任し、1971年から2001年には育児院の理事、理事長を務めた。「Mちゃんもお世話してくれたのは、斎藤久吉先生の教会の信者の人だったとか。その人の口がけで育児院に入った」（2003.7.3　山田保姆聞き取り記録）と山田が指摘するMは、育児院から尚絅女学校に進学し、卒業後は斎藤牧師が運営していたり利府農民福音学校に勤めた。Mについては、明らかに、斎藤氏の意図を軸とした育児院と尚絅女学校の連携が見られる。

ii 一例として、牧師の留岡幸助が開いた家庭学校がある。家庭学校もキリスト教主義の児童保護実践に取り組んだが、本校が東京にあり、校長の留岡が内務省嘱託を兼務していた事情もあって、政府との物理的・精神的両面の距離の近さからキリスト教の位置づけには相当に苦慮したあとがままみられる[20]。

文献

1　齋藤薫「感化院の学習指導と学校教育―内申書制度が感化教育に与えた影響―」『教育学研究』62－2、1－9（1995）：齋藤は筆者の旧姓であり、齋藤薫は筆者と同一人物である。
田澤薫『留岡幸助と感化教育』勁草書房（1999）
2　「宮城県明治38年四三四七号通知」『明治三十八年　孤貧児並労働調三ノ二』宮城県行政文書
明治38年度 71
3　田澤薫「創設期における仙台基督教育児院入所児童の特性―児童養護のあり方と保護者の養育支援の視点から―」『東北社会福祉研究』19、60－66（2001）
田澤薫「仙台基督教育児院史にみる施設児童の学校教育」『東北社会福祉研究』21、11－20（2003）
田澤薫「第二次大戦以前に施設から進学した子どもたち―仙台基督教育児院の事例からの一考察―」『東北社会福祉研究』22、19－28（2004）
4　仙台基督教育児院「昭和五年度事業概要報告」『事業報告・決算書等綴　1929－1946』（1929）分類番号 54
5　仙台基督教育児院「尋常小学校設立認可申請」（1933.1）『学校関係綴　昭和二年十月　仙台基督教育児院尋常小学校』（1927）分類番号 51
6　田澤薫「第二次大戦以前に施設から進学した子どもたち―仙台基督教育児院の事例からの一考察―」『東北社会福祉研究』22、19－28（2004）
7　尚絅女学院100年史編纂委員会『尚絅女学院100年史』尚絅女学院、163（2002）
8　尚絅女学院七十年史編集委員会『尚絅女学院七十年史』44（1962）
9　尚絅女学院七十年史編集委員会『尚絅女学院七十年史』61（1962）
10　尚絅女学院100年史編纂委員会『尚絅女学院100年史』尚絅女学院、164（2002）
11　栗原基『ブゼル先生伝』ブゼル先生記念事業期成会、604（1940）：伝記叢書109、大空社（1992）所収
12　柳橋元利「育児事業の沿革（八）」『丘の家』39－3（1938.3.）
13　仙台基督教育児院「昭和十二年度仙台基督教育児院歳入歳出予算」『雑資料』（1936）分類番号 80
14　仙台基督教育児院「育第二〇三号「ミシン」貸付申請書」『発信簿　育第一八〇号―育第二二一号』（1936）分類番号 79
15　寺脇隆夫「戦前昭和期の育児施設への入所・収容事由の検討―仙台基督教育児院の1925年―1944年度入所児童231事例の集計結果から―」『長野大学紀要』26－1、1－23（2004）
16　仙台基督教育児院『丘の家』105、2（1943.10）
17　仙台基督教育児院「注文伝票」「仙台基督教育児院洋裁部」『雑資料』（1936）、分類番号 80
18　週刊朝日編『値段史年表』朝日新聞社、28・107（1988）
19　仙台基督教育児院『丘の家』60、3（1939.12）
20　田澤薫『留岡幸助と感化教育』勁草書房（1999）

本論文は、本学エクステンションセンターが企画した「みやぎ県民大学・公開講座「心と人間教育」」の講座のひとつとして、2004年11月5日に行った講演「或るミッションスクールと子どもの施設―尚絅女学校と仙台基督教育児院の関わり―」の内容に加筆修正を行った。機会が得られたことに感謝したい。

この研究にあたっては、仙台キリスト教育児院の全面的なご協力をいただいた。とくに旧職員の山田省子氏には度重なる聞き取り調査に快く応じていただいた。ここに記して心よりの感謝を表します。

また、この研究は、平成15年度科学研究費若手研究Ｂ「仙台基督教育児院を手がかりとした1930年代東北地方における施設養護実践史究」の成果の一部であるとともに、平成17年度科学研究費若手研究Ｂ「第二次大戦以前の仙台基督教育児院史にみる施設養護と地域の関わり」の一部である。